

地域人材育成プログラムの受講者・卒業生の趣向特性の把握および要因分析

—滋賀県米原市のルッチまちづくり大学卒業生・在校生へのアンケート調査を通じて—

Grasp and analyze the actual condition of students and graduates in the Regional Human Resources Development Program

: Through a questionnaire survey of citizen university graduates and students in Maibara city, Shiga prefecture

萩原 和*

Kazu Hagihara

This research has grasped the characteristics of the participants of the local human resource development program which is implemented by local governments. This study aimed to obtain basic data on future program making. Specifically, hierarchical cluster analysis was performed and it was possible to classify into four clusters. Also, this study examined the relationship between the members' behavior and the contents of the human resource development program provided. As a result, the contents of the program differed greatly in the participation term (all eight terms were classified into three groups). In addition, it was found that the behavioral characteristics of graduates are different for each terms.

Keywords: 地域人材育成、階層クラスター分析、地域リーダー
Regional human resources development, Hierarchical cluster analysis, Local leader

1 はじめに

人口減少の中で、中山間地域を多く抱える自治体では、地域活動を存続する上でも担い手づくりが喫緊の課題となっている。特に、平成の大合併等を経験した新たな地方自治体では、広域的な行政サービスを維持しつつ、新たな担い手となりうる人材を掘り起こすことが求められている(服部・上野¹⁾)。こうした社会的背景を受けて、行政と地域住民が如何なる関係性でもって協働まちづくりを推進していくべきかについての課題と方策について検討している研究も見られるようになってきた(青木ら²⁾)。また、地域課題に積極的に対応しようとする自治体の中には、地域人材育成システムとして、独自の取り組みを進める事例も多く見られ、そうした知見を整理し共有する取り組みを国も支援している(総務省³⁾)。

一方、大学が積極的に地域人材育成に関与する事例もある。具体的には、行政の強力なバックアップのもとでカリキュラムの副専攻として、地域人材の育成プログラムを提供している京都府の事例である⁴⁾。ここで育成される人材は、京都府下の中山間地域における地域づくり人材として活躍することを意図しており、2011年度より開講した同システムでは、2018年11月15日時点で「地域公共政策士」が23名、「初級地域公共政策士」が231名となっている。

いずれの場合も、地域個別の課題に留まるのではなく、多種多様な地域人材がつながりをもって、地域力を高めていく取り組みであるが、そのような地域人材育成シ

テムは、まだその方法論が確立しているわけではない。

そこで、本研究では、自治体主導で継続実施している地域人材育成プログラムの受講者および卒業生の特性を把握するとともに、その違いを生じさせた要因を分析する中で、今後のプログラムづくりの基礎的知見を得ることを目的とする。

特に、①地域のリーダーやコーディネーターなどの地域づくりに主体的に関与する人材を輩出し、②実践的な地域人材育成のために柔軟なカリキュラム運営を展開、③継続的に人材育成システムを一定程度継続的に提供している条件が満たされている、滋賀県米原市のルッチまちづくり大学の地域人材育成の取り組み⁵⁾を研究対象とする。本事例は、継続的に地域人材育成プログラムが提供されている点、さらには平成の大合併による市域拡大によって多くの課題を抱える他自治体にも通じる知見を提供しうると考えられる。

2 研究の方法

本研究では、図1に示すように4つのステップを経て、地域人材育成プログラムのカリキュラム変更が修了生の地域参画意向に与える影響を把握する。具体的には、アンケートデータによる階層クラスター分析から人材の特性を掴むとともに、カリキュラムのタームごとの特徴を整理することで、大掴みでクラスターとタームとの連関を見る。一連の分析で得た知見をもとに、人材育成における支援方策の要点を整理する。

*正会員・滋賀県立大学人間文化学部(University of Shiga Prefecture)

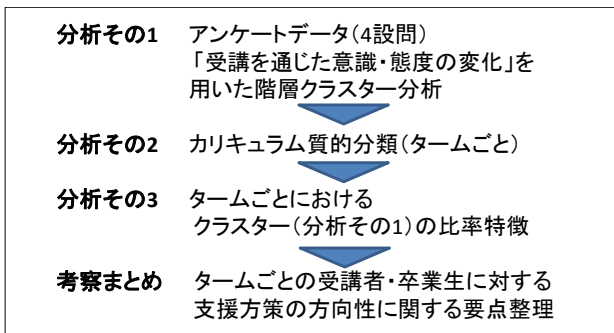


図1 本研究の分析枠組み

表1 アンケート調査の概要

アンケートの対象	ルッチまちづくり大学卒業生・在校生
調査項目	表3にて掲載
調査期間	2016年3月14日～3月27日
配布方法	米原市役所より発送
回収方法	滋賀県立大宛返信封にて回収
回収率	45.8% (88通/192通)
本研究に使用したサンプル	欠損値のない63名分のデータ群

(1) アンケート調査の概要

2016年3月に、ルッチまちづくり大学の卒業生・在校生（全8期生）に向けて、米原市役所を通じてアンケートを配布した。この結果、192名中、88名からの回答を得ることができた。なお、今回の分析においては欠損値を除いた63名分のサンプルを用いて分析および考察を行った（表1）。これによって、カリキュラム改変と卒業生の地域活動参画動向（意向）の連関をみる。一連の検証を通じて、如何にカリキュラムを構築し、求められる人材育成をマネジメントしていくべきか要件を整理する。

なお一連の分析においては IBM SPSS Statistics21 を用いた。

(2) ルッチまちづくり大学の概要

ルッチまちづくり大学は、平成の大合併以前の旧山東町が、単年度形式のカルチャータク講座でなく、個人の学習成果をまちづくりに活かすことをコンセプトに人を育てるまちづくり大学として、2001年10月に開校された。合併後の新市になってからも継続して実施されている。なお、入学資格は18歳以上で、まちづくりに関心・興味があり、継続して学習ができる人とし、市内外を問わないとしている。

一方、第7期まで同人材育成プログラムが実施される中で、実践的な地域づくりを志向する人材よりも自己実現や趣味をベースとした文化教室の延長で受講する学生も増えてきた状況にあった。もともと地域リー

表2 受講時期の分類

ターム1	ターム2	ターム3
旧山東町 (平成の大合併以前)	新米原市 (平成の大合併後)	カリキュラム改変後
第1、2、3期	第4、5、6、7期	第8期

表3 記述統計量の概要

設問		度数 (構成比%)	
属性	性別	男 42 (66.7) 女 21 (33.3)	
	居住地域	伊吹 7 (11.1) 山東 29 (46.0) 近江 4 (6.3) 米原 15 (23.8) 市域外 8 (12.7)	
	受講時期	ターム1 28 (44.4) ターム2 28 (44.4) ターム3 7 (11.1)	
	中間支援に対する意向	はい 39 (61.9) いいえ 24 (38.1)	
	受講を通じて意識・態度の変化	ルッチ大入学後に取り組みはじめた地域活動	はい 38 (60.3) いいえ 25 (39.7)
		交流頻度(同期どうし)	交流がほとんどない 21 (33.3) 年に数回程度 16 (25.4) 月に1日 12 (19.0) 月に2～3日 12 (19.0) 週に1日 0 (0) 週に2～3日 0 (0) 週に4日以上 2 (3.2)
		交流頻度(他期どうし)	交流がほとんどない 32 (50.8) 年に数回程度 15 (23.8) 月に1日 8 (12.7) 月に2～3日 6 (9.5) 週に1日 0 (0) 週に2～3日 2 (3.2) 週に4日以上 0 (0)

ダーやコーディネーターの養成を第一義に位置づけられてきたプログラムであったことから、第8期生の募集から、その性格をより鮮明に打ち出すために、「地域に根ざす。幸せになる。ルッチまちづくり大学」というコンセプトのもとで再編された経緯がある。

なお、この再編にあたっては、ルッチみらい会議と呼ばれる行政職員（生涯学習課）とルッチまちづくり大学（前身のルッチ大学）の卒業生が積極的に関与し、カリキュラム改変を実施した。

こうした背景を踏まえると、ルッチまちづくり大学の変遷は、表2に示すように、3つのタームに整理することができる。具体的には、「旧山東町（平成の大合併以前）」、「新米原市（平成の大合併後）」、「カリキュラム改変後」の3つのタームである。

以上のタームに分類した上で、提供カリキュラムの違いが、卒業生・受講生（第8期生は2018年9月段階で卒業）の意向にどのような違いが生じるかについて検証する。

3 分析結果

(1) 統計情報の概要

分析に使用した統計量の概要を表3に示す。性別においては、男性42名、女性21名の構成であり、地域においては、山東地域（29名）、次いで米原地域（15名）に居住する受講生が多い。さらに市外からの受講

表4 階層クラスター分析の結果

項目		クラスター1 (N=18)	クラスター2 (N=11)	クラスター3 (N=14)	クラスター4 (N=20)	合計 (N=63)
中間支援に対する意向 (ダミー変数)	いいえ : 0	5 27.8%	11 100.0%	0 0.0%	8 40.0%	24 38.1%
	はい : 1	13 72.2%	0 0.0%	14 100.0%	12 60.0%	39 61.9%
ルッチ大入学後に取り組みはじめた活動 (ダミー変数)	いいえ : 0	0 0.0%	11 100.0%	14 100.0%	0 0.0%	25 39.7%
	はい : 1	18 100.0%	0 0.0%	0 0.0%	20 100.0%	38 60.3%
交流頻度 (同期生間)	交流がほとんどない : 1	0 0.0%	9 81.8%	7 50.0%	5 25.0%	21 33.3%
	年に数回程度 : 2	1 5.6%	1 9.1%	2 14.3%	12 60.0%	16 25.4%
	月に1日 : 3	9 50.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 15.0%	12 19.0%
	月に2~3日 : 4	6 33.3%	1 9.1%	5 35.7%	0 0.0%	12 19.0%
	週に4日以上 : 7	2 11.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 3.2%
	交流がほとんどない : 1	1 5.6%	9 81.8%	10 71.4%	12 60.0%	32 50.8%
交流頻度 (他期生間)	年に数回程度 : 2	4 22.2%	1 9.1%	2 14.3%	8 40.0%	15 23.8%
	月に1日 : 3	6 33.3%	1 9.1%	1 7.1%	0 0.0%	8 12.7%
	月に2~3日 : 4	5 27.8%	0 0.0%	1 7.1%	0 0.0%	6 9.5%
	週に2~3日 : 6	2 11.1%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 3.2%
	交流がほとんどない : 1	1 5.6%	9 81.8%	10 71.4%	12 60.0%	32 50.8%

表5 Kruskal-Wallis の検定結果

項目	Kruskal-Wallisの検定 (IBM SPSS Statistics21による一連の分析)											
	4つのクラスターの中心位置の違いの検定 (セル内は平均順位)						各クラスターにおける多重比較					
	クラスター1 (N=18)	クラスター2 (N=11)	クラスター3 (N=14)	クラスター4 (N=20)	カイ2乗値	自由度	漸近 有意確率	クラスター比較 有意なパターンのみ掲載	検定統計① 比較するクラスターの 平均順位之差	標準偏差②	標準 検定統計 (①±②)	有意確率 (調整済)
中間支援に対する意向 (ダミー変数)	35.25	12.50	44.00	31.40	26.900	3	.000	2-4 2-1 2-3	-18.900 22.750 -31.500	5.788 5.901 6.213	-3.265 3.855 -5.070	.007 .001 .000
ルッチ大入学後に取り組みはじめた地域活動 (ダミー変数)	44.50	13.00	13.00	44.50	62.000	3	.000	2-1 2-4 3-1 3-4	31.500 -31.500 31.500 -31.500	5.945 5.831 5.536 5.413	5.298 -5.402 5.690 -5.819	.000 .000 .000 .000
交流頻度 (同期生間)	48.83	16.73	29.54	26.98	26.338	3	.000	2-1 4-1 3-1	32.106 21.858 19.298	6.776 5.752 6.309	4.738 3.800 3.059	.000 .001 .003
交流頻度 (他期生間)	50.17	21.82	25.36	25.90	29.467	3	.000	2-1 3-1 4-1	28.348 24.810 24.267	6.478 6.032 5.499	4.376 4.113 4.413	.000 .000 .000

も8名いた。中間支援への参画意向については、61.9%が「はい」、38.1%が「いいえ」と回答している。また、ルッチまちづくり大学入学後に地域活動に取り組んだかの設問には、60.3%が「はい」、39.7%が「いいえ」と回答している。さらに、ルッチまちづくり大学の同期生との交流頻度は「交流がほとんどない」、「年に数回程度」を合算した比率が58.7%、他期生との交流頻度の場合は、「交流がほとんどない」、「年に数回程度」と合算した比率が74.6%であった。必ずしも交流頻度が高い状況にはない。

(2) 分析結果

1) 分析その1

アンケート設問の4つの設問 (受講を通じた意識・

態度の変化) を用いて階層クラスター分析を行った。この分析は、クラスターの合成プロセスの経過を把握することができる。下限を3つのクラスター、上限を5つのクラスターとして分析を行った中で、もっとも解釈がしやすい4つのクラスターの結果を採用することとした。その結果は表4のように類型化できる。これによると第1クラスターは18名、第2クラスターは11名、第3クラスターは14名、第4クラスターは20名から構成された。質問項目の回答傾向もクラスターごとで大きく異なることがわかる。特に、中間支援に対する意向やルッチまちづくり大学入学後の地域活動のあり方は、クラスターごとの傾向に大きく作用する項目であることが窺えた。また、同期、他期の受講生と

表6 所属クラスターの特徴

所属クラスター	特徴	特徴(要約)	タイプ命名
クラスター1	ルッチ入学後に新たな地域活動に取り組み、ルッチの同期、他期の交流が盛ん	新規フィールド有、同期他期交流高め	交流志向・実践タイプ
クラスター2	第3グループ(新規フィールド無、同期他期交流低め)入学後の地域活動が少なく、同期、他期の交流頻度が低い	新規フィールド無、同期他期交流低め	交流消極・自己啓発タイプ
クラスター3	入学後の地域活動がないが、同期の交流頻度は高い(他期は低い)	新規フィールド無、同期のみ交流高め	交流志向自己模索タイプ
クラスター4	ルッチ入学後に地域活動の取り組みをはじめたものの、同期、他期の交流が低い	新規フィールド有、同期他期交流低め	探求志向・実践タイプ

の交流頻度も、クラスターごとで特徴が異なることが示唆された。そこで更なる分析を進めるため、類型化が統計的に有意であるかの確認を行った。当初、一元配置分散分析を実行したが等分散が仮定されなかったため、ノンパラメトリック検定である Kruskal-Wallis の検定と多重比較を行った(表5)⁶⁾。これによると、各質問項目と分類された各クラスターは、漸近有意確率がすべて0.01以下であり、それぞれにおいて分布の中心位置が異なることがわかった。ただしこの場合、どの2群に差があるかは判定できない。そこで多重比較を行い、クラスター比較を各質問項目で統計量を算出した。なお、表に記載しているものは、有意確率(調整済)で0.01以下のものである。これらを一覧化すると表6のように要約できる。

まず、クラスター1は、ルッチ入学後に新たな地域活動に取り組み、ルッチの同期、他期の交流が盛んな層であり、クラスター2は、ルッチ入学後に地域活動の取り組みをはじめたものの、同期、他期の交流が低い層である。クラスター3においては、入学後の地域活動が少なく、同期、他期の交流頻度が低い層であり、クラスター4は、入学後の地域活動がないが、同期の交流頻度は高い(他期は低い)層であることがわかる。

以上の結果を踏まえ、4つのクラスターをそれぞれ「交流志向・実践タイプ」、「交流消極・自己啓発タイプ」、「交流志向自己模索タイプ」、「探求志向・実践タイプ」と命名することとした。

2) 分析その2

「受講期の違いが、意向に反映している」のか検証するため、提供されていた科目の内容を整理する。

前段階として、提供科目と内容を、ターム別一覧化したものが表7である。なお、紙面の都合上、各回

のタイトルをすべて記述することが難しいため、主題のみ記載することとし、テーマ、運用の特徴を分類することで全体傾向を掴むこととした。

これによると、ターム1では「【1】枠」に示すように、全国からゲスト講師を多く招聘していたことがわかる。記念シンポジウムなどのコンテンツもプログラムの一部として広く一般公開することで、市民大学としてのルッチまちづくり大学の意義を発信していた。特に、この時期は旧山東町から新米原市へ移行する前段階であったこともあり、町政を学ぶ、市民協働、地域自治、まちづくり基本条例などの基礎的な知識を習得することを目的とした内容が多い。加えて「【2】枠」で示すように、「一般教養」として、生活に役立つ豆知識的な内容を盛り込み、文化教室的な側面も見られた。

ターム2の第4期では、担当コーディネーターが交代したこともあり、内容が大きく変わった時期である。特に、ターム1と比較して大きく異なるのは「【3】枠」で示すように、米原そのものをテーマとして、地域性を重視し、内容を掘り下げる方向に転換がなされた。具体的には、歴史学や民俗学の観点から米原学として学びの体系化を図るとともに、より実践的なまちづくりを行う上での協働のあり方やアプローチ方法を習得するような内容が盛り込まれた。またこの頃に「【4】枠」で示すようにルッチまちづくり大学卒業生が米原市内で活躍し始めた時期であり、こうした卒業生の取り組みを学びのテーマとして捉え、先輩講座としてカリキュラムに盛り込んでいる。同大学を受講した経験のある関係者が、自身の課題関心に基づき新たなまちづくり活動に取り組む姿を垣間見ることによって刺激を受けることを意図している。またこの先輩講座は、その後の卒業生ネットワークの強化やルッチまちづく

表7 研究対象における地域人材育成プログラムのカリキュラムの一覧

期間	期生	ルッチ 在学生・卒業生	米原市に関わる テーマ全般	ゲスト講師 (県内(米原市外))	ゲスト講師(全国)【1】	一般教養【2】	フィールドワーク イベント企画運営	事例研究	その他備考
タイムム1	1期生	■まちづくり(3)「山東ホテルまつり」から見たまちづくり	■地域の取り組みから学ぶ「伊吹町杉原地区の取り組み」が家のISO」 ■学校教育の課題～わがまち編 ■まちづくり(1)美しい山をめぐって いま、なぜ市町村合併なのか ■市町村合併を考える	■まちづくり(2)生涯学習とまちづくり ■ふるさと再発見(1) ■地域を知る(2) ■生活を見直す(1) ■地域活動 ■新しい社会をつくる道 ■NPO ■生活と福祉 共に生きる「福祉のまちづくり」 ■ふるさと再発見(2)	■国際理解(1) ■町政を学ぶ(1) ■町政を学ぶ(2) ■情報社会「情報と私たちの生活」 ■国際理解(2) ■住民参加 ■まちづくり(4) ■町政を学ぶ(3) ■選挙とまちづくり ■生涯学習とボランティアの意義と展開 ■まちづくり実践(1) ■まちづくり実践(2) ■まちづくり実践(3) ■まちづくり実践(4) ■まちづくり実践(5)	■家庭と法律(2) ■聖夜の夜を彩るルッチツリーのクリスマス ■地域イベント・ホテル祭に参加(模擬店出展) ■やいと参加(模擬店出展) ■山東(310)・タウンウォッチング ■卒業研修・先進地視察(愛媛県双海町・徳島県勝町)	■事例研究チームへのアプローチ(1)・(2)・(3) ■事例研究グループ討議 ■自主学習1, 2, 3, 4, 5, 6, 7(グループ研究活動) ■まちづくり計画(2) ■事例研究中間報告会 ■まちづくり計画(3) ■事例研究最終報告会	■ルッチ大新年会 ■ミニパーティー ■イベント夢と光の祭典 ドリームライオンとうら1学年 ■(2回生)始業式 & まちづくり計画(1) ■卒業式 & ミニパーティー	
	2期生	■市民参画(1)市民参画型イベント「ホテルまつり」から見たまちづくり	■市民参画(1)市民参画型イベント「ホテルまつり」から見たまちづくり ■学校の現状	■地域改革の仕掛け人から学ぶ(1)「近江八幡のまちづくりと八幡堀」 ■環境保全 ■情報化社会 ■消費生活「地域通貨とまちづくり」 ■青少年健全育成 ■ボランティア活動論	■記念シンポジウム「住民と協働によるまちづくり」 ■まちづくり(1) ■まちづくり(2) ■ワークショップ「はじめよう環境とまちづくり」 ■生涯学習による市民が主体のまちづくりを実現するために ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(2) ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(3) ■行政を学ぶ(1) ■イベントの企画・立案(1) ■自分がまはすすべての基本、自分プランニングを一緒に、自分のポジション ■まちづくり実践(1) ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(4) ■ふるさと再発見(2) ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(5) ■まちづくり実践事例(1) ■行政を学ぶ(2) ■コミュニケーション ■上手な話し方・可会新 ■まちづくり実践(2)	■家庭と税金	■ふるさと再発見(1) ■地域探検(タウンウォッチング) ■卒業研修・先進地視察 ■まちづくり計画(1)中間報告会 ■まちづくり計画(2)最終報告会 ■卒業式 ■まちづくり実践「ルッチツリーのクリスマス」 ■まちづくり実践(3)	■事例研究へのアプローチ(1)・(2) ■事例研究(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8)・(9)	■ルッチ大学、大学院入学式、オリエンテーション & ワークショップ ■ディナーパーティー 交流会 ■新年会 ■ワークショップ「ブレインストーミングと仲間づくり」 ■1学年終業式 & ミニパーティー ■新年会 ■ミニパーティー ■卒業式 & ミニパーティー
	3期生	■市民参画(1)市民参画によるホテル祭り	■ふるさと再発見(1)自然編 ■ふるさと再発見(2)歴史編 ■ふるさと再発見(3)歴史編 ■市の子どもの現状 ■NPO事例(2)	■ワークショップ(仲間づくり) ■環境保全 ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(3) ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(4) ■男女共同参画社会づくり ■NPO事例(1)	■記念講演「市民生活のまちづくりとまちづくり基本条例」 ■生涯学習のまちづくりの必要性 ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(1) ■地域の子育てを核としたまちづくり ■コミュニティビジネスとまちづくり ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(4) ■文化とまちづくり ■青少年とまちづくり ■地域学のすすめ(1) ■ワークショップ「まちづくり人生ゲーム」 ■ボランティア活動論 ■市民の自立 ■情報化社会 ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(6) ■地域改革の仕掛け人から学ぶ(6) ■高齢社会に求められるもの ■21世紀の地方自治・住民自治 ■NPO概論	■経営理念	■ふるさと再発見(4) ■タウンウォッチング ■ふるさと再発見(5) ■タウンウォッチング ■まちづくり実践(1) ■イベントの企画・立案(1) ■まちづくり実践(2) ■卒業研修・先進地視察	■事例研究へのアプローチ ■事例研究(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8) ■スキルアップ(事例研究中間報告会) ■スキルアップ(事例研究最終報告会)	■ルッチ大学、大学院入学式、オリエンテーション ■ワークショップ「まちづくり人生ゲーム」 ■事務局対応) ■1学年終業式・卒業記念パーティー ■新年会 ■ミニパーティー ■卒業式 & ミニパーティー
	4期生	■ルッチ大学のススメ	■(記念講演)持続可能なまちづくり ■目からウロコの米原学 歴史編 ■目からウロコの米原学 文化編 ■地域の課題共有～協働へのアプローチ① ■地域の課題共有～協働へのアプローチ② ■地域の課題共有～協働へのアプローチ③ ■地域の課題共有～協働へのアプローチ④ ■地域の課題共有～協働へのアプローチ⑤	■仲間づくりとワークショップ ■湖国を取り巻く時代の潮流～合併市町村はいま～ ■キラリ地元企業① ■琵琶湖への私たちの責任 ■まちづくり探訪 ■キラリ地元企業② ■地域の課題共有③ ■学生提案ゲスト(長浜農高作物オペレーター)	■地域改革の仕掛け人① ■団塊の世代と地域づくり【公開】 ■地域改革の仕掛け人②【公開】 ■市民参加の教育づくり ■まちづくりと情報発信 ■企画力アップ1 大作戦 ■防災と地域力～被災地の現実から～ ■セーフティコミュニティ ■地元学のすすめ ■創年活動のススメ【公開】 ■地域改革の仕掛け人④【公開】			■How To 事例研究 ■まなびからアクションへ 事例研究(1)・(2)・(3)・(4)・(5)・(6)・(7)・(8) ■スキルアッププレゼン(事例研究・中間発表) ■スキルアッププレゼン(事例研究・最終発表)	■オリエンテーション ■1年次修了式 ■船月 夜の茶話会 ■卒業式 ■卒業視察研究(1年次修了段階)
タイムム2	5期生	■ルッチ大学先輩講座②上丹生プロジェクトKの取り組みに学ぶ	■目からウロコの米原学 歴史編 ■目からウロコの米原学 民俗編 ■目からウロコの米原学 伊吹山編 ■みらいづくり隊(米原市における地域おこし協力隊)と語ろう	■(記念講演)地元学とそのこと ■目からウロコの米原学 歴史編 ■水巡る地域の文化にまなぶこと【公開】 ■団塊の世代と地域づくり ■地域改革の仕掛け人② ■地域改革の仕掛け人③ ■地域改革の仕掛け人④	■素敵なまちづくり 最初的一步 ■地域改革の仕掛け人①【公開】 ■ゆるゆるスローでいよいよローカル【公開】 ■集落を支える「もうひとつの村役場」 ■記念講演「地域の営みに目を向けて、地元の声に耳を傾ける。そして」【公開】 ■素敵なまちづくり 企画力アップ1 大作戦 ■スローなカフェから地域が変わる【公開】	■ルッチ大学先輩講座①【現地研修】 ■フィールドワークde上丹生のチュリップまつりに参加しよう【現地研修】 ■ラノネ食堂でかまごはん体験【現地研修】 ■視察研修旅行@京都府綾部市	■How To 事例研究 ■まなびからアクションへ 事例研究1～10 ■スキルアッププレゼン(事例研究・中間発表) ■スキルアッププレゼン(事例研究・最終発表)	■入学式/オリエンテーション ■1年次修了式 ■交流会 ■卒業式 ■卒業式	
	6期生	■ルッチ大学先輩講座② ■ルッチ大学先輩講座③	■目からウロコの米原学 歴史編 ■地域や家族の絆を大切にすまちづくり ■目からウロコの米原学 霊山編～伊吹山文化資料館に学ぶ「協働のカたち」 ■五感で感じる自然の癒し ■目からウロコの米原学 民俗編 ■みらいづくり隊のみなさんと語ろう!	■(記念講演)地元学とそのこと ■マンパワの掘り起し ■自分の暮らしは、自分でつくろう ■世代の超えたまちづくり	■素敵なまちづくり 最初的一步 ■地域に元気を起こそう～笑顔で明日の力に～【公開】 ■遊び場づくりはまちづくり ■半農半×という生き方～スローレボリューションでいこう! ■村落集合体の試み～新しい「クニ」の形【公開】 ■森と風のがっこう【公開】 ■ルッチ大学10周年記念事業「ルッチまちづくり座フォーラム」 & 交流会 ■素敵なまちづくり 企画力アップ1 大作戦	■ルッチ大学先輩講座①【現地研修】 ■視察研修(1泊2日)	■How To 事例研究 ■まなびからアクションへ 事例研究1～10 ■スキルアッププレゼン(事例研究・中間発表) ■スキルアッププレゼン(事例研究・最終発表)	■入学式/オリエンテーション ■1年次修了式 ■卒業式 ■交流会	
	7期生	■まいばら学 自然編②(先輩講座②) ■まいばら学 自然編③(先輩講座③) ■まいばら学 地域コミュニティ編②自治のかたち(先輩講座④) ■まいばら学 地域コミュニティ編③協働のしくみ(先輩講座⑤) ■まいばら学 なりわいづくり編②(先輩講座⑥)	■まいばら学 歴史・民俗編① ■まいばら学 歴史・民俗編② ■まいばら学 人と暮らし編①こまちで育つ・育む ■まいばら学 人と暮らし編②こまちで老いる・交える ■まいばら学 人と暮らし編③次世代に伝える ■まいばら学 地域コミュニティ編①まちを守る ■まいばら学 なりわいづくり編①	■地域学とそのこと	■【公開講座】 里山資本主義～希望と幸福への選択肢 ●素敵なまちづくり 企画力アップ1 大作戦 ■地域改革の仕掛け人【公開】	■まいばら学 自然編① 山野のめぐみ(先輩講座①)【現地研修】 ■まいばら学 歴史・民俗編③【現地研修】	■How To 事例研究 ■まなびからアクションへ 事例研究1～12 ■スキルアッププレゼン(事例研究・中間発表) ■スキルアッププレゼン(事例研究・最終発表)	■入学式/オリエンテーション ■1年次修了式 ■卒業式 ■交流会	
タイムム3 (1年次卒業生)	8期生		■地域に根ざす～米原の未来の可能性～ ■「農」を生かした私のまちづくり ■米原のタウン情報誌「まいスキッ!」 ■地域を活かす人財～河内福祉会の取り組みから ■【公開講座】米原の幸せって何だった? ～「豊かさ」を考える～	■めぐみのめぐりあわせ～地域学からはじまる～ ■自分と向き合う～今までの自分の棚卸～ ■他者と向き合う～相手を知ることとは自分を知ること～ ■地域プロデュース論～地域と向き合う 地域をうごかす ■「心が楽しくなるコミュニケーション」～自己や他者と向き合いながら～	■【公開講座】カラーキャラバン～カラー論からつながるコミュニケーションづくり	■米原人財/森集 ■イベント作りワークショップ	■餅を囲む交流会 ■コース選択オリエンテーション		

り大学卒業後のフォローアップの機会づくりとしても位置付けられた。

チーム3(8期生の受け入れ時)では、チーム2での取り組みを踏まえつつも、さらに実践的な取り組みをカリキュラムに位置づけるようになった。特に「【5】枠」に示した「人財ノ森集会」は、市内の人的ネットワークと、地域課題テーマを結び付けて、あらたな地域課題テーマの設定、実践を促す企画であり、ルッチ大学卒業生が中心となって企画運営している。

以上をまとめると、チーム1が、全国の先進事例を取り入れながら、米原市独自の人材育成プログラムとして整備していく黎明期の段階、チーム2が米原市独自のプログラムとして体制を整えた段階、チーム3が卒業生の地域活動を盛り込んだ充実期の段階にあると要約できる。

3) 分析その3

ここでは、分析その2で得られた分析結果を用いて、チームごとにおけるクラスター(分析その1)の比率特徴を把握する。具体的には、「交流志向・実践タイプ」、「交流消極・自己啓発タイプ」、「交流志向・自己模索タイプ」、「探求志向・実践タイプ」の4つのクラスターと、3つのチームとの連関、属性ごとの特性を把握検証する手立てとしてクロス集計を実行した(表8)。

これによると、チーム1(28名)では、「探求志向・実践タイプ」が39.3%と最も高く、次いで「交流志向・実践タイプ」が35.7%となっている。

一方、チーム2では、「交流志向・実践タイプ」が28.6%、「交流消極・自己啓発タイプ」が14.3%、「交流志向自己模索タイプ」が25.0%、「探求志向・実践タイプ」が32.1%となっており、4つのタイプが混在する傾向を示している。

なお、チーム3は、「交流志向自己模索タイプ」に偏る傾向を示した(85.7%)。

以上、大掴みではあるものの、「受講期の違いが、意向に反映している」という傾向が裏付けられる結果となった。

4 考察

(1) 見いだされる人材像の整理

まず、階層クラスター分析で得られた人材像は、「交流志向・実践タイプ」、「交流志向自己模索タイプ」、「交流消極・自己啓発タイプ」、「探求志向・実践タイプ」の4つに分類された(前掲の表6参照)。

ルッチまちづくり大学の概要でも示したが、本来同大学は、地域リーダーやコーディネーターの養成を第

表8 タームと所属クラスターのクロス表

	クラスター1 交流志向・実践 タイプ (N=18)	クラスター2 交流消極・自己啓発 タイプ (N=11)	クラスター3 交流志向・自己模索 タイプ (N=14)	クラスター4 探求志向・実践 タイプ (N=20)	全体 (N=63)	特徴の整理
チーム1	10(35.7%)	6(21.4%)	1(3.6%)	11(39.3%)	28	「探求志向・実践タイプ」、「交流志向・実践タイプ」の2つが大勢
チーム2	8(28.6%)	4(14.3%)	7(25.0%)	9(32.1%)	28	4つのタイプが混在
チーム3	0(0.0%)	1(14.3%)	6(85.7%)	0(0.0%)	7	「交流志向自己模索タイプ」が大勢

一義に位置づけてきた。この趣旨に照らしあわせると、「交流志向・実践タイプ」がもっとも理想に近い属性といえる。また、「探求志向・実践タイプ」においても、交流志向ではないが、各自が特定のフィールドを得て活動を行っている層である。

その一方で、「交流消極・自己啓発タイプ」は、特定のフィールドを持たず、ルッチまちづくり大学の受講後は特に地域活動を実践しているわけでもない。その意味において、当初の人材育成の理念に沿った動きが見られなかった層である。なお、「交流志向自己模索タイプ」については、現状で同期生同士の交流は高い傾向を示し、これからフィールドを得て活動しうるポテンシャルを持っている層と見なすことができる。

(2) タームごとの人材像の特徴と改善策の方向性

階層クラスター分析によって、大まかな人材像を掴むことができたが、「交流志向・実践タイプ」を理想の人材モデルとして捉えた場合、その他の3つのタイプの人材にはどんな支援策が考えうるかを以下に整理する。なお、ここでは、統計的な差を検証するのではなく、分類された各チームの卒業生、受講生のタイプを大掴みな傾向として把握することを重視した。結果として以下のような対応策が見い出された。

1) ターム1(第1~3期生)の卒業生への対応

この時期の卒業生は、生涯学習や文化教室としてのルッチまちづくり大学への受講が動機づけとしてあったと考えられる。地域に対する関心は高いと思われ、当時のカリキュラムでフォローできなかったまちづくり実践に触れ合う機会づくり(卒業生同士の交流、特にフィールド訪問など)を同大学の窓口事務局が盛り上げることも有効と思われる。

2) ターム2(第4~7期生)の卒業生への対応

「交流志向・実践タイプ」を除いて、3つのタイプが混在するが、中でも「交流消極・自己啓発タイプ」のフォローアップをどうするかが鍵である。もともと交流に消極的な層であり、必ずしも地域活動に興味を持って受講していなかった可能性がある。しかしながら、地元学などの教養的な知的探究心は高く、そうした潜

在的な興味関心を活かすような取り組みが地域活動の
一歩になる可能性がある。現状ではルッチまちづくり
大学に同窓会組織はないが、実践活動に触れるような
定期的な集まりの会を立ち上げることで地域実践の機
会を盛り上げることも有効と思われる。

3) ターム3 (第8期生) の在校生 (2018年9月修了) への対応

この層においては、同期生のつながりはあるため、
他期生とのつながりづくりに注力する取り組みが有効
と思われる。現状で活動するフィールドがない人が多
いことから、卒業生のフィールド訪問を契機としなが
ら、自分に適した活動の場を探索する機会の設定が重
要と考えられる。

5 まとめ

本研究では、自治体主導で継続実施している地域人
材育成プログラムの受講生・卒業生の特性を把握し、
その違いを生じさせた要因を分析する中で今後のプロ
グラムづくりの基礎的データを得ることを目的とした。

具体的には、対象者に対してアンケート調査を実施し、
そこで得られたデータを階層クラスター分析によって、
4つの所属クラスターに分類した。次いで、提供カリキ
ュラムの時期と所属クラスターとの連関を分析し、一
連の結果から、タームごと(3つのグループに分類)の
卒業生、受講生に対する支援方策の方向性を整理した。

なお、クラスター1に属する人材については、今後、
リーダーシップを発揮するためにも、中間支援的な取
組みを推進するコーディネーターとしての役割、さら
には、地域活動に消極的なルッチまちづくり大学卒
業生等への参画の呼びかけなど、卒業生の一員として
ネットワークづくりを促すような役割が求められよう。

一方、自治体が主催する地域人材プログラムにおい
ては、不特定多数の募集に対して平等に科目提供がな
される。これ自体は、生涯学習の観点からは全うな判
断であるが、その一方で人材育成後のストックを経年
的に把握しながら、その後のフォローアップを手厚く
していくことも併せて考える必要があると思われる。

調査時点(2017年)においては、第8期の受講生メ
ンバーが入学間もない時期であったが、約2年を経て、
第9期生の入学が2019年度に控えている。このように、
地域人材育成が米原市独自の取り組みとして着実に根
を張りつつある。こうした人材のネットワークが今後
とも継続できるように、多様な立場の人々が共にカリ
キュラムづくりに関与できる環境がより一層大事にな
ると思われる。

本報告は、米原市政策推進課および生涯学習課、ル
ッチまちづくり大学の卒業生、受講生の関係各位の多
大なる協力のもとで取りまとめることができた。また、
滋賀県立大学地域共生センターの関係者によるサポー
トのもとで、調査研究を推進することができた。この
場を借りて、ご協力いただいた関係各位に御礼申し上
げる次第である。

なお、一連の研究は、文部科学省「地(知)の拠点
整備事業」による滋賀県立大学公募型地域課題研究(平
成27、28年度)の助成によって実施された成果である。

参考文献

- 1) 服部俊宏・上野裕士(2015):旧村から複数集落を
単位とした地域自治組織の設立経緯と評価の全国
的傾向、農村計画学会誌、34(Special issue)、
195-200
- 2) 青木秀幸・青木和也・太田辰隆・鎌田元弘(2012):
協働のまちづくり推進における課題と方策:南房
総市を事例とした市民と市役所職員の現状認識・意
向についての比較検証、農村計画学会誌、31、
243-248
- 3) 総務省人材活性化・連携交流室(2013):地域づく
り人育成ハンドブック、1-144
- 4) 一般財団法人地域公共人材開発機構:事業案内 地
域公共政策士、<<http://www.colpu.org/>>
更新日2018年11月15日、参照日2018年11月26日
- 5) 米原市:ルッチまちづくり大学
<http://www.city.maibara.lg.jp/kosodate_kyoiku/gakushu/matidukuri_daigaku/index.html>
更新日2018年8月2日、参照日2018年11月26日
- 6) 内田治(2014):SPSSによるノンパラメトリック検
定、オーム社、97-112

注)

本稿は平成27-28年度滋賀県立大学公募型地域課題研
究(2017)「ルッチまちづくり大学で育まれた地域人財
のすがた」(研究代表者:萩原和)で取りまとめた調査
報告のデータを踏まえて、更に分析考察を行い、加筆・
修正を行ったものである。